

同窓生 シリーズ

71



20回生

澤田 伸一
さわだ しんいち

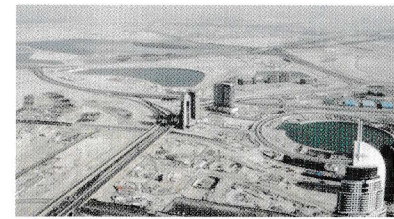
◆プロフィール

1950年生。武蔵工業大学・建築学科卒。1973年竹中工務店入社。76年アブダビ国際空港作業所、84年アメリカ竹中、99年同代表、02年アブダビ、ドバイ駐在。05年ドバイ国際空港作業所長。現在専用ターミナル総括作業所、役員補佐。

雨上がりの抜けるような青空にそびえたつ世界一の超高層ビル、「沸騰都市」ドバイの変貌と世界同時不況による衰退ぶりは劇的であり、渦中で直接肌を感じられたことは幸運としか言いようがない。米国十八年の駐在生活に続き海外勤務でしか味わえない貴重な経験であった。入社四年目、初の大規模国際入札で勝利したアブダビ空港建設工事、十六時間の飛行の後砂漠の地に立った。360度の地平線に囲まれ、ドロドロと燃えるような真つ赤な太陽が地平線に沈むのを見た時自分の小ささを感じ、それまでの人生観を根底から覆してくれた。今では友達からも「今のおまえの姿は想像できない」と言われる程の変化だった。たぶんもう「普通の日本人」ではなくなっているのだろうか、日本の生活に多少の違和感すら覚えるが日本を外からしつかりと見ることはできた。今年は六十歳の還暦、定年退職を迎えるが現在カタール、ドoha国際空港の工事も担当しておりチャレンジは続くだろう。アブダビ、米国での駐在の他シンガポール、マニラなどを含め三十年以上の長期間の海外勤務を支えてくれたのは若干の英語力(とい



世界一の超高層ビルブルジュ・ハリファからの眺望
DIFC (ドバイ国際金融センター)



ハリファビルを中心にNYマンハッタンを模して開発されている地域(ビジネスベイ)

の水泳合宿で人並みに泳げるようにしてくれスポーツ人間に変えるきっかけを作ってくれた。そして二年、三年担任の英語の津田先生、今でも鮮明に印象に残る濃紺のピンストライプスーツに身を固めた英国紳士宮崎先生。英語の成績も良くはなかったが英語に興味を持ったことが海外で活躍できる原動力になった。三年になっても大学入試勉強そつちのけで建築・都市計画の専門書ばかり読んでいた。第一希望の大学にはいけなかったが、自分の好きなことに全力を注いだこと、それを見守って黙って支援してくれた両親の理解があったて今の自分があるのだと思う。思えば自己の確立には高校時代の過ごし方、校風の影響が大きかったと思う。ドバイの青空を見ていると、遠くカリフォルニア、そして汐見の抜けるような青い空が改めて思い出される。新宿高校は「新宿」そのものであり「歴史」「変革」「自由」「多様性」が根底にあると思う。この精神だけはずっと伝えていた。ありがたい。僕もこれからも一日一日を全力で常に前をみて生きていきたい。Rolling Stone gathering no moss 「常に活動している人は新鮮で沈滞しない」でしたよね宮崎先生。